

# 看護マネジメント実習にアクティブ・ラーニングを取り入れた効果

吾妻知美、筒井佳澄

京都府立医科大学医学部看護学科

## Effectiveness of Incorporating Active Learning in Nursing Management Practices

Tomomi Azuma, Kazumi Tsutsui

Department of Nursing, Kyoto Prefectural University of medicine

### 要約

本研究は、看護学科4年生看護師コースの必修科目である看護マネジメント実習を受講した52名を対象に、関心のあ  
るテーマについてグループ演習で事前学習、臨地実習、事後学習を行うアクティブ・ラーニング（以後、ALとする）  
を導入した教育実践の効果を検討することを目的とした。データは実習アンケートと実習記録で、自由記述は、テキス  
トマイニングによる①単語頻度分析、②ことばネットワーク分析を行った。その結果、すべての学生はALを取り入れ  
た実習方法を有意義であると感じ、目標到達度も高かった。テキストマイニングの単語頻度分析では、《できる》《わかる》  
《積極的》《主体的》《学び》《深める》といった単語が多く抽出され、能動的な学習が促進されたと思われた。さらに、  
ことばネットワーク分析では、【テーマの学び】【インタビューの学び】【ALの学び】【現場の学び】といった学びの内  
容が明らかになった。

ALを取り入れた看護マネジメント実習は、自分が選んだテーマの学びのみならず、各グループが発表した看護マネ  
ジメントに関する専門的な知識も深めることができていたことが示唆された。さらに、学生が選定したテーマは臨床現  
場の新人看護師に関することが多く、就職後に直ぐに役立つ自己管理や安全管理、新人看護師に対する様々なサポート  
体制の実際であった。これらの学びは、学生の不安の解消や、新人看護師に起こりがちなリアリティショックを乗り越  
える知識と実践力を身につけることにつながると思われる。

キーワード：看護マネジメント実習、アクティブ・ラーニング、評価研究、テキストマイニング

### I. はじめに

21世紀は単なる知識や技術の獲得ではなく、それを活用し応用する能力を獲得していくことが重要であり、こうした学力はコンピテンシーといわれている。コンピテンシーの具体的内容は①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、③自律的に行動する能力で、この3つのキー・コンピテンシー枠組みの中にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性である。そして、深く考えることとは、目前の状況に対して特定の定式や方法を反復継続的に当てはめることができる力だけではなく、変化に対応する力、経験から学ぶ力、批判的な立場で考え行動する力が含まれる。このようなコンピテンシーを育成できるのがアクティブ・ラーニングである<sup>1)</sup>。

アクティブ・ラーニング (Active Learning : 以後

ALとする) は、「教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学習 (アクティブ・ラーニング)」<sup>2)</sup> と定義され、2000年代に入ってから日本の大学において注目され、2017年の学習指導要領改訂のポイントのひとつに位置づけられたことから、小学校から大学までの全教育が衆目を集めている学習論である。また、AL型授業は、PBL問題解決型学習法、プロジェクト型学習法、反転学習法といったグループに依拠した学習法が採用されているのが特徴である。

緒方は<sup>3)</sup>、共同学習法は「学生が学習仲間と互恵的人間形成を形成しながら主体的に、責任と意欲をもって学ぶことが可能」で「将来、看護職者として指導者として求められる資質・能力形成につながる」と述べていることから、グループに依拠した学習方法は看

護教育でこそ必要な教育方法であるといえる。また、ALは教員の一方的な講義形式の教育と異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れたグループ・ディスカッション、グループワーク、ロールプレイなど様々な形態を含むことから、看護基礎教育の中では決して新しい教育方法ではない。しかし、効果的な教育方法として蓄積されているとはいいきれず<sup>4)</sup>、看護学臨地実習におけるALの評価研究もほとんど行われていない<sup>5)</sup>。

看護基礎教育課程では、2008年の『保健師助産師看護師学校養成所指定規則』の改定において、新たに『統合分野』が設けられ、看護の統合と実践という教育内容が追加された。臨地実習においては、“専門分野での実習を踏まえ、実務に即した実習を行う。一勤務帯を通した実習を行う。夜間の実習を行うことが望ましい”という内容が求められることとなった。この改正を踏まえ本学では、2016年度より看護師コースを選択した学生に対し、看護基礎教育の集大成として、看護における総合的な実践能力を高めることを目的に、「看護マネジメント実習」と「看護領域別統合実習」からなる『看護の統合と実践Ⅱ（実習）』（2単位）を設置した。看護マネジメント実習については多くの教育機関に採用されており、看護実践能力の習得に効果的であると報告がされている<sup>6,9)</sup>。また、本学の「看護領域別実習」のうち、老年・在宅領域実習の成果については、すでに報告している<sup>10)</sup>。

本学における看護マネジメント実習は4日間で、実習目標のひとつに、「関心のあるテーマの解決に向け、自律的に実習できる」がある。この目標達成のためにALを取り入れた。そこで、本研究の目的は、看護マネジメント実習にALを導入した教育実践の効果を検討することである。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 対象者

看護学科4年生看護師コースの必修科目である『看護の統合と実践Ⅱ（実習）』（看護マネジメント実習）を受講した52名。

### 2. データ

#### 1) 『看護マネジメント実習アンケート』

実習評価のために毎年実施している『看護マネジメント実習アンケート』のうち、設問の「関心あるテーマに関するアクティブ・ラーニングは有意義でしたか?」について、①とても有意義だった～④全く有意

義ではなかった、の4段階の順序尺度とその理由の自由記述。

#### 2) 『実習記録 自己評価表』

『実習記録 自己評価表』のうち、評価項目「関心のあるテーマの解決に向け、自立的に実習できる」について、A指導を受けて目標を達成できた～D指導を受けても目標を達成できなかった、の4段階の順序尺度と理由の自由記述。

## 3. 分析方法

1) 実習目標の自己評価については数量化し、記述統計とする。

2) 自由記述は、文章という定性的なテキスト情報を、系統的に、分析手続きのエビデンスを残しながら処理する情報処理ツール、Text Mining Studio Ver6.0.3 (NTT データ数理システム)を用いる。テキストマイニングは、文章という定性的なテキスト情報を、系統的に、分析手続きにエビデンスを残しながら処理する情報処理ツールである<sup>11)</sup>。今回用いた分析は①単語頻度分析（どのような単語が何回出現するか）、②ことばネットワーク分析（単語間の共起関係を抽出して有向グラフとして出力する）を行い学生の学びを明らかにする。

## 4. 倫理的配慮

本研究は、京都府立医科大学医学倫理審査委員会の許可を得て行った (ERB-E-424)。研究依頼は実習成績評価が終了後に研究者が書面と口頭で目的と方法、研究協力の有無による学生の不利益は生じないことについて説明を行い、同意書を得る。データは匿名化、数量化するため個人が特定されることはない。また、本研究は対応表を作成しない匿名化を行うので、同意の撤回があっても試料・情報を廃棄できないことについてあらかじめ説明した。

## Ⅲ. 実習概要

### 1. 実習目的と目標

実習目的は、「変化・発展し続ける社会や医療に対応した質の高い効果的な看護を行うために、組織における看護マネジメントおよびチーム医療の実際を理解し、既習の学習および臨地実習の経験と統合することで、看護の総合的な実践能力を高めることができる。」である。実習全体の目標を以下に示す。

目標1：組織における看護管理者の役割を知る。

目標2：組織におけるリーダーシップの重要性を理

解する。

目標3：病棟におけるマネジメントの内容と重要性について理解する。

目標4：病棟における多職種連携と看護の役割を知る。

目標5：関心のあるテーマの解決に向け、自立的に実習できる。

実習指導は、研究責任者である筆者と基礎看護学領域の教員4名で担当するが病棟には常駐せず、学生は看護師長の指導の下で実習を行った。

## 2. 看護マネジメント実習におけるアクティブ・ラーニングの展開

事前、事後演習グループは5～6名とし、実習第1日目の午後は、看護マネジメント実習においてグループで特に注目したいテーマ（これまでの授業や実習で学んだ理論や概念、モデル等）について、「理由」、「学習した内容」、「情報収集の方法」を記載する『実習事前演習用紙（グループワーク）』を作成する。

実習第2日目の午後は、『実習事前演習用紙（グループワーク）』の発表会と意見交換に基づき、情報収集内容の修正と翌日のインタビューの練習のための演習を行った。

実習第3日目は、病棟実習である。学生配置は演習グループを2つに分け、1病棟に2～3名配置し、病棟看護師長へのシャドーイングによるマネジメントの実際の理解と、関心のあるテーマに基づいたフィールドワークを行った。

実習4日目は、テーマ毎に結果をまとめ、グループ毎にパワーポイントでプレゼンテーションを行った。

ALを実施するにあたり、学生の主体的な活動を重視した。その上で、指導教員の関わりは、関心あるテーマを決める段階でテーマが重複しないこと、発表会終了後に、「情報収集の方法」についての助言をすることを実習前の打ち合わせで確認した。また、学生がフィールドワークをしたい内容は、病棟実習前日に各病棟の看護師長に伝え、学生主体で行う旨を説明した。看護師長はテーマに応じ、インタビューを受ける看護師を選定するなどの事前準備と、当日も実習時間内にインタビュー等できるよう配慮を行った。

## Ⅲ. 結果

### 1. 学生がアクティブ・ラーニングしたテーマ

学生が取り組んだテーマは、「新人看護師が自立するまでの支援－新人看護師の自立とは－」「新人看護

師に対するリスクマネジメント－新人以外のスタッフによる医療事故防止対策について－」「新人看護師のリスクマネジメント－インシデントへの対応－」「小児病棟で働く新人看護師のストレスマネジメント」「患者と看護師の安全のための看護師長による災害時の管理」「新人、未・既婚のワークライフバランスの実態と工夫」「看護師長による医療安全の取り組み」「3交代勤務のシフトの組み方と配慮」「中堅看護師の役割と課題－人材育成とキャリアアップの両立－」の9テーマで、新人看護師に関するテーマが多かった。

### 2. 学生の感想及び目標達成度

実習目標のうち、「目標5：関心のあるテーマの解決に向け、自立的に実習できる」の学生の自己評価は50名（96%）が、「A：指導を受けて目標を達成できた」と自己評価し、2名（4%）が「B：指導を受けてほぼ目標を達成できた」であった。（図1）

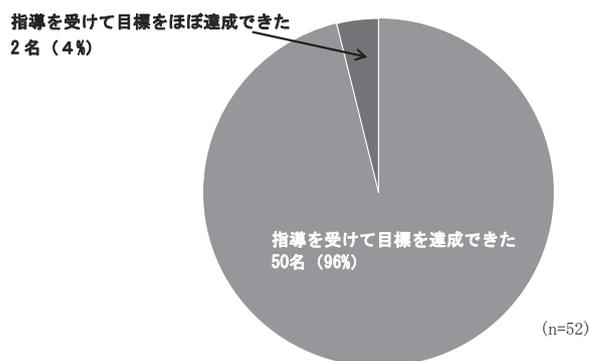


図1. 目標達成度の自己評価

また、教員評価による本実習全体の目標達成については、「目標4：病棟における多職種連携と看護の役割を知る」のみ、6名（11%）が「B：指導を受けてほぼ目標を達成できた」であったが、他の目標は全員が「A：指導を受けて目標を達成できた」と高評価であった。

学生アンケートでは、実習全体の感想について「とても有意義だった」「有意義だった」と回答していた学生が47名（92%）で、「あまり有意義でなかった」と回答していたのは4名（8%）であり、理由は記述がなかった。ALの感想は、すべての学生が「とても有意義だった」「有意義だった」と回答していた。（図2、3）

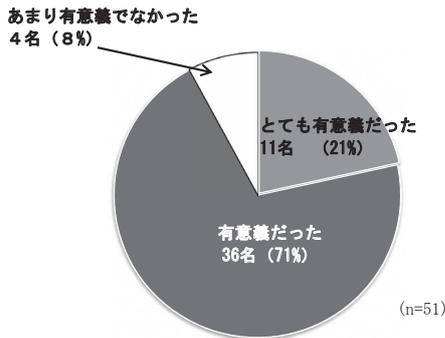


図2. 実習全体の感想

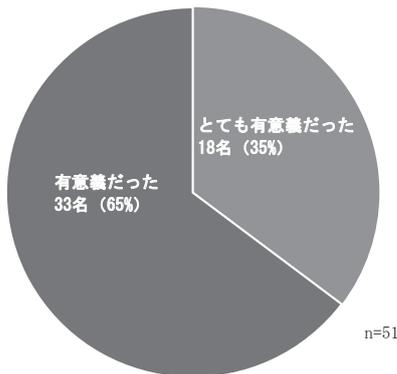


図3. アクティブ・ラーニングの感想

### 3. ALで学んだ内容のテキスト分析

以下、抽出単語を《 》、共起関係を「-」、クラスターを【 】, 原文を「 」で示す。

#### 1) 単語頻度分析

自由記述のデータは、『看護マネジメント実習アンケート』は40名、『実習記録 自己評価表』は52名

の記述があり、このうちALの学びの記述は135文脈であった。延べ単語数は637単語であった。単語頻度分析のうち5回以上出現した単語24位までを示す。(図4)

最も多く出現した単語は《テーマ》で68回、以下《インタビュー》28回、《学ぶ+できる》20回、《師長》《質問》17回、《学び》《知る+できる》14回、《積極的》12回などで、具体的には「テーマについてインタビューを通して学び、考えることができた」「関心あるテーマについて師長にインタビューして学びを深められた」といった内容である。

#### 2) ことばネットワーク分析

図5は学生が学んだ内容を記述した文脈のことばネットワークを有向グラフで示したものである。グラフの要素である頂点を色付きの丸印(ノード)で表現し、個々のノードはそれぞれの単語頻度を示している。単語頻度の多い単語ほど、大きなノードで表現される。ノードを結ぶ矢印(エッジ)の太さで共起関係の頻度を表している<sup>12)</sup>。図5の有向グラフの中から、2回以下の組み合わせを排除したところ、A、B、C、D、Eの5つのクラスターに分けられた。これらを破線の丸印で囲んだ。

《テーマ》を中心にしたことばネットワークのクラスターAは、《テーマ》という単語を中心に、《テーマ》-《学ぶ+できる》の共起関係の出現度が17回で最も多く、その他《わかる》《知る+できる》《興味》《見る》などのノードが集まった、【テーマの学び】クラスターである。具体的には「自分の興味のあるテーマ

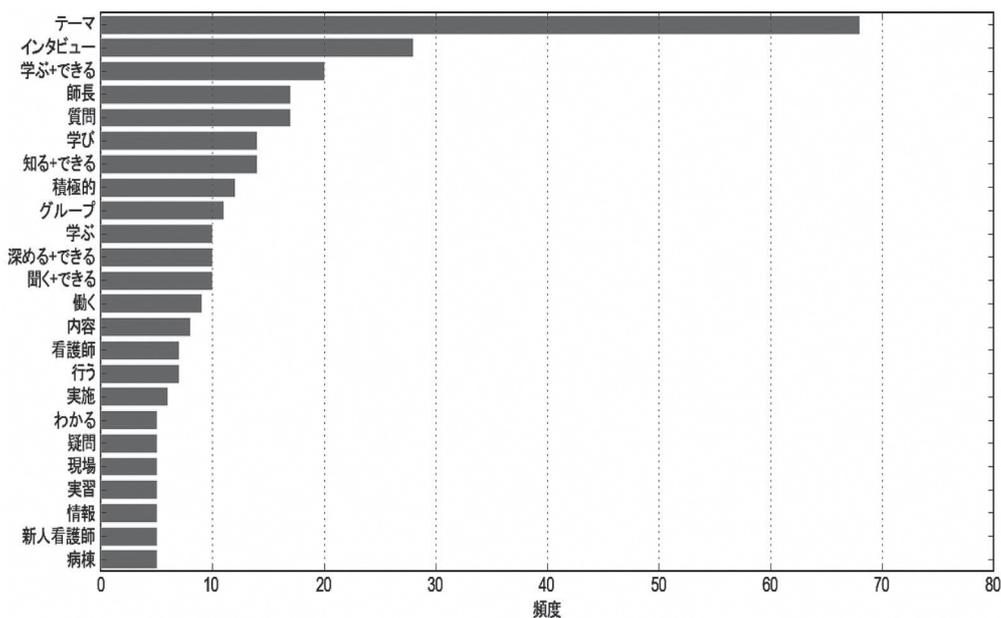


図4. 単語頻度分析

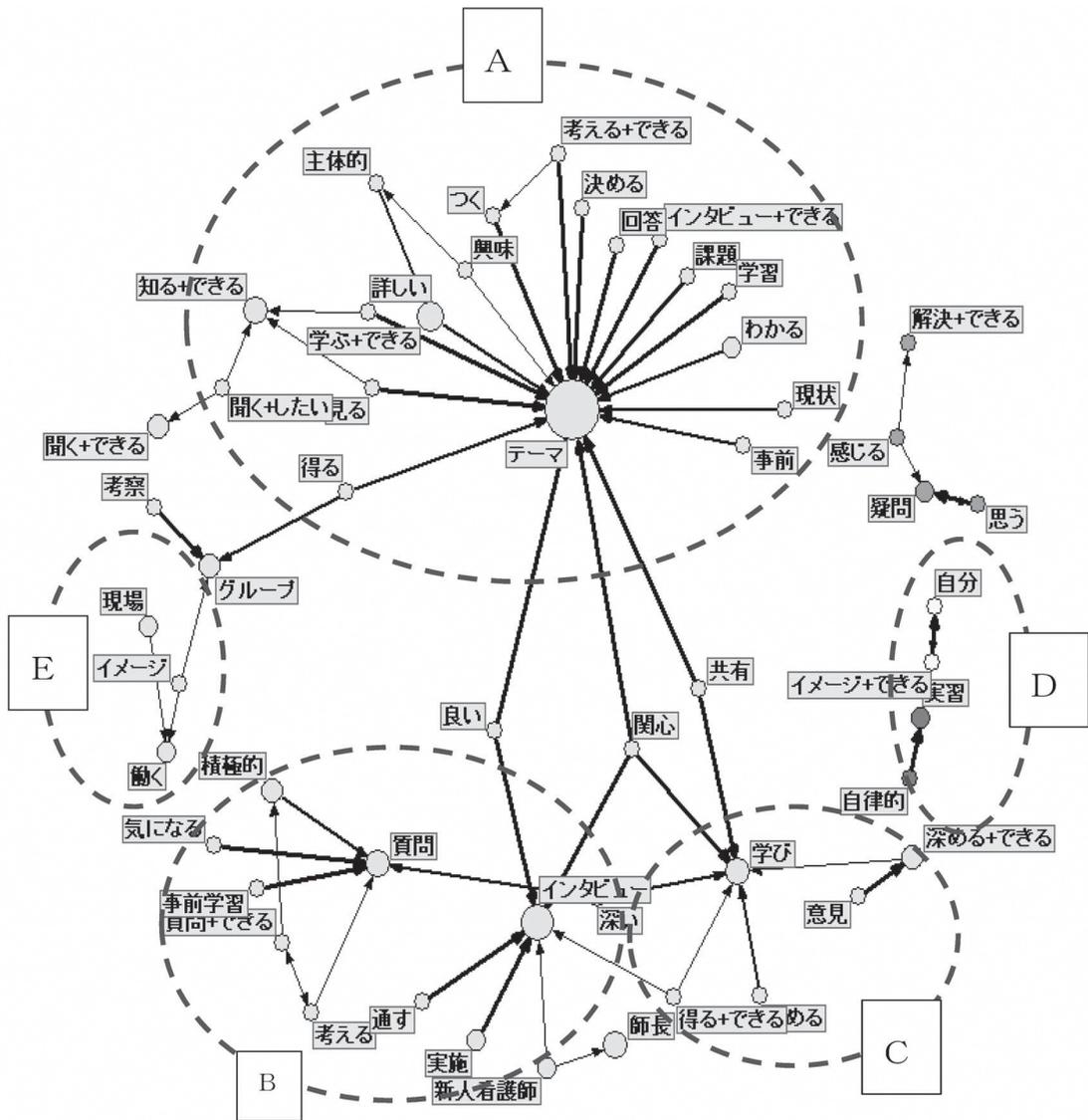


図5. ことばネットワーク分析

であるためより主体的に学ぶことができた」「自ら関心のあるテーマを設け、積極的にインタビューを実施し学びを深めることができた」といった内容である。

《インタビュー》を中心にしたことばネットワークのクラスターBは、《インタビュー》-《実施》の共起関係の出現度が6回で、その他《質問》《良い》《気になる》《積極的》《事前学習》《新人看護師》《師長》などのノードが集まった、【インタビューの学び】クラスターである。具体的には「グループで決定したテーマについてインタビューから情報を得て、考察し解決することができた」「師長や新人看護師へのインタビューから実際に理解できた」といった内容である。

《学び》を中心にしたことばネットワークのクラスターCは、《学び》-《深める+できる》の共起関係の出現度が6回で、その他《できる》《得る+できる》

《共有》《関心》《意見》などのノードが集まった、【ALの学び】クラスターである。具体的には「事前学習の内容と関連付けて質問することでより深い学びにつなげることができた」「グループ内での情報を共有しテーマについて学びを深めることができた」といった内容である。

クラスターDとEについては、少数ではあるがマネジメント実習そのものの学びを中心にしたクラスターで、《現場》《働く》《自分》《イメージ》などのノードが集まった、【現場の学び】クラスターである。具体的には「自分の将来をよりクリアにイメージできた」「新人看護師として働くイメージが他のグループ発表からすることができた」「4月から働いていくうえで不安なことを払拭することができた」といった内容である。

#### IV. 考察

本学4年生のマネジメント実習において、関心のあるテーマについてグループで事前学習、臨地実習、事後学習を行うALを取り入れた結果、すべての学生は有意義であると感じ、目標到達度も高かった。テキストマイニングの単語頻度分析では、《できる》《わかる》《積極的》《主体的》《学び》《深める》といった単語が多く抽出され、能動的な学習が促進されたと思われた。さらに、ことばネットワーク分析では、【テーマの学び】【インタビューの学び】【ALの学び】【現場の学び】といった学びの内容が明らかになった。

本実習では、3年次に学んだ「看護マネジメント論」で学んだ理論や概念、モデルを臨地実習の経験と統合することで看護の総合的な実践能力を高めることを目的としている。緒方は<sup>13)</sup>、能動的学修行動を引き出すためには、学生が知識を組み立て、発見し、変形して広げ、さらに学生が、意欲的に自らの知識を構成することが必要であると述べている。したがって、学生の関心のあるテーマでのALが学生の能動的な行動を促進したといえる。さらに、学生は、ALを通して、自分が選んだテーマだけではなく、各グループが発表した看護マネジメントに関する専門的な知識を深めることができていることが示唆された。

ALの協同学習の基本要素のひとつに、学習活動の改善のための建設的な評価が求められる<sup>14)</sup>。奥山らは<sup>5)</sup>、老年看護学実習にグループワークとプレゼンテーションを導入したALにより、【知識の獲得と新たな発見】【効果的なプレゼンテーション技法と学習の深まり】【回復期リハビリテーションにおける看護実践の方法と看護職の役割の理解】【目標達成に向けたチーム作り】【学習の楽しさと学習の動機づけ】ができたことを報告している。本実習において、学生からはプレゼンテーションに関する記述は抽出されず、学生個人の自己評価のとどまってしまうと推測された。今後は、ALのグループ学習の質を高めるために、自他の学習活動の評価についても取り入れることが必要であると考えられる。

本実習においては、ALにより「関心のあるテーマの解決に向け、自律的に実習できる」という目標と、「組織における看護管理者の役割を知る」「組織におけるリーダーシップの重要性を理解する」「病棟におけるマネジメントの内容と重要性について理解する」「病棟における多職種連携と看護の役割を知る」の4つの目標を掲げている。『保健師看護師助産師指定規則』における「看護の統合と実践(4単位)」では、チー

ム医療および他職種との協働の中で、看護師としてメンバーシップおよびリーダーシップを理解する内容とすること、看護マネジメントできる基礎能力を養うことが明記されている。小野らは<sup>7)</sup>、看護管理実習は臨床実践能力の習得、看護マネジメントできる基礎能力の育成につながっており、学生の理解度として医療チーム、安全管理、人材確保と育成の内容が高かったと述べている。西尾らも<sup>15)</sup>、講義と2日間の短い見学実習という内容の看護管理実習であっても、看護管理の意義や重要性を学ぶことができ、学生が専門職を目指すための方向性に影響をおよぼす意義があると述べている。

本実習の目標は、『保健師看護師助産師指定規則』が求める内容に準拠しており、短期間の実習でも、ALを導入することで看護管理の意義について目標達成は可能であったと考える。しかし、学生たちが関心を持ったテーマは、新人看護師に関するものに偏りがあったことは否めない。目前に就職を控えた学生にとって、身近なテーマに関心が偏ることは想像に難くない。しかしながら、臨床現場において新人看護師に対する様々なサポート体制があることを知ることで、不安の解消や、新人看護師に起こりがちなリアリティショックを乗り越える知識と実践力を身につけることにつながるのではないかと考える。

実習評価については、実習目標それぞれについて学生の自己評価と教員評価により、A指導を受けて目標を達成できた～D指導を受けても目標を達成できなかった、の4段階としている。近年、看護実践能力を評価する方法としてパフォーマンス評価が注目されている。パフォーマンス評価とは、知識やスキルを単に暗記・再生するだけでなく、リアルな状況において活用・応用・総合する力を評価するもので<sup>16)</sup>、2017年学習指導要領改訂にあたって、ALの視点からの授業の改善を図り、パフォーマンス評価などを取り入れてバランスの取れた学習評価を行うことが推奨されている<sup>17)</sup>。

今後は、マネジメント実習の目標に準拠した学習活動に対応したルーブリックを作成し、学生自身が実習目標に向かって自己活用しながら主体的・自立的に学ぶために活用することが必要であると考えられる。

#### V. まとめ

本学4年生のマネジメント実習において、関心のあるテーマについてグループで事前学習、臨地実習、事後学習を行うALを取り入れた結果、すべての学生は

有意義であると感じ、目標到達度も高かった。テキストマイニングの単語頻度分析では、《できる》《わかる》《積極的》《主体的》《学び》《深める》といった単語が多く抽出され、能動的な学習が促進されたと思われた。さらに、ことばネットワーク分析では、【テーマの学び】【インタビューの学び】【ALの学び】【現場の学び】といった学びの内容が明らかになった。

ALを取り入れた看護マネジメント実習は、自分が選んだテーマの学びのみならず、各グループが発表した看護マネジメントに関する専門的な知識も深めることができていたことが示唆された。さらに、学生が選定したテーマは臨床現場の新人看護師に関することが多く、就職後に直ぐに役立つ自己管理や安全管理、新人看護師に対する様々なサポート体制の実際であった。これらの学びは、学生の不安の解消や、新人看護師に起こりがちなリアリティショックを乗り越える知識と実践力を身につけることにつながるのではないかと考える。

#### 謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力してくださった看護学科看護師コース4年生の皆さま、実習に関わってくださった皆様に心より感謝いたします。

#### 文献

- 1) 荒井英靖編著 (2018) : アクティブラーニング時代の看護教育, 4, 東京 : ミネルヴァ書房.
- 2) 安永悟, 関田一彦, 水野正朗編 (2016) : アクティブラーニング・シリーズ1 アクティブラーニングの技法・授業デザイン, i - iii, 東京 : 東信堂.
- 3) 緒方巧 (2016) : 看護学生の主体性をはぐくむ協同学習, 3, 東京 : 医学書院.
- 4) 村上大輔 (2019) : 看護学教育におけるアクティブラーニングの研究動向, 東北文化学園大学看護学科紀要, 8 (1) : 19-26.
- 5) 奥山真由美, 道繁祐紀恵, 杉野美和他 (2015) : 高齢者の退院支援における看護実践能力を育成するためのアクティブ・ラーニングを導入した老年看護学実習の評価, 山陽論叢, 22, 11-20.
- 6) 良村貞子, 岩本幹子, 青柳道子他 (2007) : 複数の患者を受け持つ看護管理実習の展開, 看護総合科学研究会誌, 10 (3), 65-76.
- 7) 小野晴子, 川崎泰子, 掛谷純子他 (2012) : 臨床実践能力の習得に向けた統合実習Bの達成度, 新見公立大学紀要, 33, 1-10.
- 8) 渡邊真紀, 石田美知, 加藤紀子 (2017) : 看護師長同行における看護管理実習でのマネジメントに関する学生の学び, 第47回 日本看護学会論文集 看護管理, 2017 : 161-164.
- 9) 岩坂信子, 尾形裕子 (2017) : 継続統合看護学実習におけるジョブシャドウイング導入による看護マネジメントに関する学生の学び, 北海道文教大学研究紀要, 41 : 97-107.
- 10) 江本厚子, 大橋純子, 岡野明美他 (2017) : 看護の統合と実践IIにおける京都府北部地域での学び, 京都府立医科大学看護学科紀要, 28 : 77-80.
- 11) 服部兼敏, 鷲田万帆 (2008) : 学際的技術としてのテキストマイニング—その意義と看護における可能性—, 看護研究, 41 (3) : 239-258.
- 12) 服部兼敏 (2010) : テキストマイニングで広がる看護の世界, 135, 京都 : ナカニシヤ出版.
- 13) 前掲書3) : 3-4.
- 14) 前掲書2) : 7.
- 15) 西尾ゆかり, 太田節子, 藤野みつ子他 (2007) : 総合看護学実習II (看護管理で得られた看護学生の学び, 市が医科大学看護学ジャーナル, 5 (1) : 58-63.
- 16) 糸賀暢子, 元田貴子, 西岡加名恵 (2017) : 看護教育のためのパフォーマンス評価 ループリック作成からカリキュラム設計へ, 8, 東京 : 医学書院.
- 17) 前掲書16) : 11.